

# 女殺油地獄

近松門左衛門作

## 上卷 道行みなれざを

歌船は新造の乗り心、サヨイヨエ。君と。我と。

我と君とは。圖に乗つた乗つて来た。し

つとんとんくしとんく。しつと逢

瀬の波枕。盃はどこ行た。オンド君が歪

つも飲みたや武藏野の。月の。月の夜すが

ら戯れ遊べ。ナホス唯し立てたるフシ大騒ぎ。

北の新地の。地料理茶屋。主人なけれど咲

く花や。後家のお龜がうけこんで。客の變

名は郎九として生れは陸奥會津にて名代流さ

ぬ金遣。此の頃難波此の廓へ登りつめたよ

天王寺屋。小菊を思ひ。思はれたさに。鯨

川よりゆらくと。スエテ野崎参りの屋形

船。卯月半の初暑さ。小オクリ末の。閑に追練

りてまだ肌寒き川風を。酒に凌ぎてアソを、

陀。娑婆示現觀世音。三世の利益。三年横

き。去々年戊亥の春は。裏屋せどやに罪

深く。針箱箱や。數珠袋。そこに目の目

も見ず知らぬ。フシ一文不通の衆生まで。

千手の御手の。掴みどり。紫磨黄金の御肌

に忽ち那智の觀世音。去年は和州法隆寺。

聖徳太子の。タ、千百年忌。ツレこれ亦

救世の大悲の化身。シテ續いて今年此の薩

埴。二人樓過ぎにし山里の。誰訪ふべくもな

かりしに老若男女の。フシ花咲きて。足を

そらく空吹く風に。散らぬ色香の伊達参

り。大人童も謠ふを聞けば。歌往くもちん

つ。歸るもちんつ。又来る人もちんつちり

つて。チリテツテ。ナホス傳を頼みの乗合

船は。借切るよりも得庵堤。體に舳をこぎ

顔自慢。やゝともすれば痴話事の。それに

任せた身の上も。人も恥づかし氣づまり

と。フシオクリ小菊は陸へ一飛にびらりば

うしのふかくと。ホフシ眉は隠せどとりな

りの。町で名古屋の胸高帯は。小オクリ小笠

に。露のたまられぬ始末算用世智辯も。人

にこそよれ品にこそよれつ。冷泉もつれつ。

道草に。人の言草ア、むつかしく。うるさ

く憎くいやらしく。我が供船を小手招き。

歌これの見さんせナ愛宕の山にヨエ。沈の煙

が。三筋立つ煙がナ沈の。沈の煙が。三筋

立つ。ナホス四筋に別れ。玉銚の。これより

辰巳奈良街道。丑寅隅は八幡道。玉造へ

は。未申。西はもと來し京橋や野田の片

町。大和川。こゝは名に負ふ壽命の松。フ

シ御代長久の岡山を。歌には忍の岡とも詠

み。さらゝ山口一ツ橋渡して救ふ御願力。

無量無邊の聚福開慧眼視衆生念彼觀音。身

得度者の御誓。問ふも語るも行く船も徒歩

念誦を三遍くり返す

フシ所を問へば。地本天満町まらの幅さへ

細々の。柳腰やなぎ髪とろりとせいも種

油。梅花紙漉し荏の油。オクリ夫は。豊島屋

七左衛門妻の野崎の開帳参り。姉は九ツ三

人娘だく手。引く手に。見返る人も。子

持とは見ぬ花ざかり。吉野の吉の字を取つ

てお吉とはたが名付けけん。お清は六ツ中

娘。母様ぶぶが飲みたいも折節そばの出茶

屋みせ。フシこ、借りますと休らひぬ。地是

も同町筋向ひ。河内屋與兵衛また廿三親が

かり。同商賣の色友達刷毛の彌五郎皆朱の

善兵衛。野崎参りの三人連れ萬事を夢と飲

み上あけし。ねざめ提重五升樽坊主持して

北うづむ。小菊めが客と連立ちよしくと

下向するも此の筋と。のさばかりかへつて來

る道の。茶見世の内より申し、與兵衛

様。こゝへくと呼びかけられ。御やお吉

様子供衆連れての参りか。存じたら連にな

りましょもの。七左衛門殿は留守なざる、

か。いやこちの人も同道二三軒寄る所もあ

り。地追付けこゝへ見える筈。お連衆もマ

ア是へ。ひらにくと強ひられて煙草一服

致さうかと。腰打かくるものんこらし。御

何と與兵衛様。御繁昌な参りではないかい

の。よい衆の娘子達やお家様がた。地アレ

く、おそこへ桔梗染の腰變り。縮緬の帯し

やぢやわいのく。御ソレくくそこへ

縮緬に鹿子の帯。地たしかに中の風と見た

又一位見ごとでは有るぞ。御いかさま若い

お衆が此のよな折に。あんな見事な者引連

れ。贅のやりたいは道理。こな様も連立ち

たい者がある。こんな折に新地の天王寺屋

小菊殿か。新町の備前屋松風殿か。なんと

ようしつてゐるか。地なぜつれ立つて参ら

んせぬと。ばつと乗すればふはと乗り。御

残多いあつばれ今日は物の見事なことだ。

参りの群集に目を覺させうと。此の中から

もがいたれど備前屋の松風めは先約が有つ

て。もらひも貸しもならぬとぬかす。地天

王寺屋の小菊めは野崎へは方がわるい。と

なたの御意でも参らぬといひ切る。御それ

に聞いて下され。小菊めが今日會津の客に

揚げられ。早天から川御座で参りをつた。

地田舎者に仕負ては此の與兵衛が立たぬ。

小菊めが歸るを待つて一出入と。咄しの内

から二人の連。腕押し揉んで力みかけ。フ

シ鬼とも組むべき勢ひなり。御それく問

ふには落ちず語るに落ちると。利口さうに

それが信心の觀音参りか。喧嘩仕のら参

り。買はしやんすお山も傾城も。何屋のた

れ何屋のたれと。親御達がよう知つていと

しほや。そちへは與兵衛めが間がな隙がな

入りひたつてをる。意見して下されとわし

ら女夫に折入つて口説事。こちの七左衛門

殿も言やらぬ事は有るまい。定めしこな様

の心には。所こそあれ野がけの茶見世で若

い女ごのさまで。入子鉢の様な面々の子供

の世話ばかりやきをらす。小さく出たと憎

かろが。地此の諸萬人の群衆を突退け押退

け目に立つ風俗。本天満町河内屋徳兵衛といふ油屋の二番息子。茶屋々々のわけもろくに立てず。あのざま見よと指さしするが笑止な。質實な兄御を手本にして。商人といふ物は一文銭もあだにせず。雀の巢もくふにたまる。随分かせいで親達の肩助け

と。心願立てさんせ脇へはいかぬ其の身の莊嚴。ハア氣に入らぬやら返事がない。姉おぢや早う参らう。道でこちらの人に逢はしやんしたら。本堂に待つてゐるといつて

下さんせ。地茶屋殿過分と袂より置く茶の鉢の八九文。四分におもく五分には。軽々しけの物参りフシ別れてお吉は通りける。悪性の上塗する皆朱の善兵衛。あの女は

與兵衛が筋向ひのおか様でないかい。物ごしもどこやら戀の有る美しい顔で。扱々堅い女房ぢやな。されば年もまだ廿七。色はあれと數の子ほど産みひろけ。地世帯染うで氣が質實よい女房にいかい疵。見かけばかりでうまみのない。フシ船細工の鳥ぢや

と笑ひける。かくとはいかでしろうとの。田舎の客に揚げられて。つれて。其の後家交り變りちんつの國訛り。は甚左衛門幸左衛門が思案ごとと四郎三が怒

ひごと。ちんつ。く。ちんちりつてつて。地日本一の名人様やつちやくと褒める歌より褒めさする。フシ金ぞ諸藝の上手なる。地そりやく来たぞと三人が。手ぐすね引

いたる顔色。小菊遠目にはつと驚き。じ花車さん。同じ道ばかり氣が盡きる。地の船に乗りたいたいと裾かい取つて立ち休らふ。前に與兵衛帆柱立跡に仁王の張番立。與兵衛せくな女郎と詰開いて男立てい。

會津蠟燭が光りだてしたら。此方二人が心切つて踏み消してくれろと。地草履を腰に腕まくり。客は顛倒花車も下女もうろたへ。フシ小菊を圍うてうぞぶるふ。小菊殿借つた。馴染の河與が借るからはいごかせぬと。地茶屋の床几に引きすり据ゑ。是賣女様安お山様。野崎は方が悪いどなたの

御意でも参らぬと。此河與とつれに成るを嫌ひ。好いた客と参れば方も構はぬか。其のわけ聞かうと理窟はる眼玉の鬼門金神もなどやかにコレ河與さん。角が取れぬ。小菊といふ名が一つ出れば。與兵衛と

いふ名は三つ出る程深いくと。いひ立てられた二人の中。つれ立つて参らぬもみんなこな様のいとしさゆゑ。人に唆てられけしかけられ何ぢやの。地わしが心は誓文かうぢやと。スエテひつたりと抱寄せ。フシしみ

じみ呷く。地色こそ見えね河與が悦喜。エ忝いと伸びた顔付客は堪らず側にどうと腰掛け。小菊殿お身は聞えぬ。如何なる縁にか會津様程いとしい人は。大阪中に無いと云つたぞよ。國許の外閉身の大慶と。大

事のお金を湯水の様川遊び。ちよがらかられにや來申さない。其の男が聞く前で。地無耶々々の關。二度と越し申さない。どうだ。とフシせめせちがふ。地言ひ合せし

二人の連つかく〜と寄つて。圓ヤイもさめ。此の女郎こつちへもらふ置いて歸れ。地但東土産に川の泥水振舞はうかと。兩方より立ち袂み投けてくれんす面構へ。阪東者のどう強く。圓何さぶいく〜ども。人威しの腕に色々のほり物して喧嘩に事寄せ。懷中の物取ると聞及ぶ。貧乏といふ棒に騙をなぐられ。腰膝も立たぬ遊女狂ひ。上方の泥水より奥州者の泥足喰へと。地つつと寄り蹴上ぐる足首。刷毛が願蹴違へられ。どうと轉んでころ〜小川へだんぶとはね落され。是はと取付く皆朱が大事の命の玉。縮み込む程蹴つけられ憲が翔けた南無三と。呆れて空をみち〜。腹這ひ〜フシ逃けて行方はなかりけり。地友達投げさせ見てるぬ男。逆様に植ゑてくれん〜とむづとつかめば振放し。圓やちよございなげざい六。鯉骨引飲いてくれべいと。地くらはす拳を受け外しては撲ち返し。叩き合ひ掴み合ふ。なう氣の通らぬはどうぞ

と。中へ小菊が柵に入りア、怪我さしやんすな大事の身と。花車が圍へば下女も手を引き立て隔つ。そりや喧嘩よと諸人の騒ぎ。茶屋は見世をしまふやら。二人は絶體絶命の。撲ち合ひ組み合ひ堤の片岸踏みくづし。小川にどう〜落ち別れ。藻屑沙土まひこみ砂。互に投げかけ。掴みかけ打合ひ打付け扱ひ手なき相手勝負氣根。較べと三度〜見えにける。地折りこそあらめ島上郡高槻の家の子。お小姓達の出頭小栗八彌。馬上に上下御代參の徒士若黨。揃ひ羽織の濃柿に智恵の輪の大紋。手ぶりの先供はいはい。〜の聲をも聞かず與兵衛が。たぐりかけてうつ泥砂。出合拍子に馬上の武士の拾上下皆具迄。ざつくとかくるも時の運。栗毛忽ち泥付毛沛艾鞍も鎮まらず。與兵衛もはつと驚く所それがすなと徒士の衆。ばら〜と取巻く中。相手は川を渡り越し小菊も花車も手ばしかく。フシ参りの諸人に紛れて退く。地徒士頭山本森右衛

門與兵衛が。兩脇かいてぎやつとのめらせ。膝を脊骨にひしぎ付くる。圓ア、お侍様怪我でござる御免なませ。地お慈悲〜と吠面かく。圓こいつ慮外者。お小袖馬具に泥をかけて怪我というては濟まぬ。面を上げいと首ねぢ上げ。ヤア森右衛門殿叔父ちや人。ム、與兵衛めかと。地互にはつと驚きしが。圓ヤイ汝は町人いかやうの恥辱を取つても暇にならぬ。且那より御扶持を蒙り。二字を首にかけた森右衛門。慮外者を取つて押へ。甥と見たればなほ助けられぬ。討つて棄てる。地立ちませいと小腕を取つて引立つる馬上の主人ヤイ〜。圓ヤイ森右衛門。見れば其の方が大小の鞘口詰めやうが緩さうな。ふと鞘走つて怪我でもして血を見れば殿の御代參叶はず。歸らねばならぬ。下向迄は随分鞘口に心を附けて森右衛門供をせい〜。地ハアはつとお詞添く。圓汝下向には首を討つ。地暫しの命と突放し。随分叔父が目にかゝるなど

言ひたけれども侍氣。聲せぬ夏の手ふり驚  
はいくく。武家のいきかた泥まぬ御馬

フシ足を早めて急がる。地與兵衛うつとり

と夢か現か酔ひたる如く。南無三叔父の下  
向に斬らるゝ筈。斬られたり。死なう死ん

だらどうしよと心は沈み氣はうはもり。逆  
けてくれうと駈け出で。調ハアかういけば

野崎。地大阪はどちらやら方角がない。  
こつちは京の方あの山は闇峠か。但し比叡

山かどこへいたらば通れうと。眼も迷ひう  
ろたへア、どうかせう。何と加賀笠お吉と

見るより地獄の地蔵。調ヤアお吉様下向か。  
わしや今斬らるゝ助けて下され。地大阪へ

連れていて下され。フシ後生でござると泣  
き拜む。調イヤこちやまだ下向ぢやないわ

いの。七八町行たれど餘り人ぜり。こちの  
人待合せにこゝ迄歸つた。エ、氣疎なけな

身も顔も泥だらけ。地氣が違うたか與兵衛  
様。調尤々喧嘩して泥を掴み合ひ。跳馬に

乗つた侍に。その泥がかゝつてそれで下向

に斬らるゝ筈。頼みます〜と立去らず。  
調エ、呆れ果てた親御達の病に成るがいと

しまい。地向ひとしのけん〜ともならず。  
茶屋の内借つてふり濯いで進ぜましょ。調

顔も洗ひとつと、大阪へ歸つて。以後を嗜  
ましまんせ。又こゝ借りますお清よ。地と

と様が見えたら母に知らしや〜と。二人腹  
實の奥ながきフシ日影も晝に傾けり。地さ

ぞや妻子が待つらんと辨當かたけかた〜  
に。姉の手を引く豊島屋の七左衛門。咽喉

が渴けど飲むまも急ぐ。茶屋の前にて中  
娘。アレと〜様かと縋り寄る。ヲ、待ちか

ねたか母はどこにと尋ねれば。調かゝ様は  
こゝの茶屋の内に。河内屋の與兵衛様と二

人帯解いて。ベ〜も脱いで〜ござんする。  
ヤア河内屋與兵衛めと。帯解いて裸體に成

つてぢや。エ、口惜しい目を抜かれた。さ  
うして跡はどうぢやく〜。さうして鼻紙で

拭うたり洗うたりと。地聞くよりせき立  
つ七左衛門。顔色變り眼もすわり門口に立

ちはだかり。調お吉も與兵衛も是へ出よ。  
地但し出すばそこへ踏込込むと。呼ばはる

聲にこちの人か。調子供がお晝食の時分も  
忘れ。どこに何してゐるさしやんしたと。地

出る跡から與兵衛が。調七左衛門殿面目な  
い。ふとした喧嘩に泥にはまり。色々お内

儀様のお世話。是も七左衛門殿のおかけ。  
地忝といふ小鬘先髪こむすの鬘も泥まぶれ。身

は濡腹立やらをかしいやら。挨拶もせず  
はお吉。調人の世話もよいころにしたがよ

い。若い女が若い男の帯解いて。さうして  
跡で紙で拭ふとは尾籠至極疑はしい。餘所

の事はほからかしてサア〜参らう日が聞  
ける。地ヲ、〜待つてゐました詳しい事

は道すがらと。姉が手を引きこはだく。中  
は父親肩車ていじんに法の教も一つは遊山ゆざんフシ群集

を分けてぞ急ぎける。地與兵衛ひとり茶屋  
の見世。とほんとしてゐる所に。亭主を初

めあたり在所の者ども五六人。調さきにか  
らこゝな人は参りか下向か。一ノ所にうろ

ろと合點いかぬ。サア 地通つたと追立つ

ろ 拵からはいくくの聲に交はる轡の

音。小栗八彌下向の徒歩立ち與兵衛うろた

へ逃げ損ひ。押割る供先叔父の目に。かゝ

る不祥の出合頭ひつ捕へねぢする。調最前

は御參詣今は御下向慎しみなし。調討つて

棄つると刀の柄に手をかくる。調待て待

て森右衛門。其の者討つて乗てんとはなげ

く。彼奴は最前の慮外者。他人ならば少

少は見遁しにも致し。御免なされ下し置か

るゝ様の執り成しをも申すべき所。彼奴  
が母は拙者が兄弟。現在の甥何とも地助け  
難しと申しもあへぬに。調シテ其の科とい  
ふは何事。御尋に及ばず御服に泥を投げか  
け。御身を穢しよごしたる科。いや〜此  
の八彌が身を穢せしとは心得ず。是見よ着  
類のいづくに泥が付いたるぞ。イヤ召替へ  
られぬ以前のお小袖。されば〜。着替ゆ  
れば泥をかゝらぬも同然では有るまいか。  
御意とは申しながら既に御馬の鞍籠も泥に

そみ。地お徒歩でお歸りなさるゝは。旦那

に恥辱を與ゆる慮外者と。申し上ぐれば黙

れ〜。調馬の皆具には泥のかゝる物故

に。障泥といふ字は泥をへだつと書く。

泥のかゝらぬ物ならば何しにへだつるとい

ふ字の入るべきぞ。恥辱も慮外も科もな

し。武士たる者の恥辱とはたゞ一擧の濁水

も。名字にかゝるは洗ふに落ちず濯ぐに去

らず。あれら體の雜人身が目からは泥水。

地泥より出でて泥にそまぬ蓮の八彌。名字

は穢れぬ助けてやれ。ハアはつと又有難  
き。御意を大事に振る手を揃へ足揃へ行  
列。立てゝぞ 三重

中之卷

杖。腰に腰當首に數珠巾着代の水飲み。河

内屋徳兵衛店頭に立寄り。調何と與兵衛内

にか〜。調中何事なう。お山勤めて有難

い今日の下向は知れたこと。懇な友達は桑

津迄迎ひにぢや。お主一人見えぬは氣色で

もわるいか。忝い御利生見てきた。是が土

産先づ話さう。西國者とやら。兩眼つぶれ

た十二三の盲が。大願かけて山上し行者様

を拜む中。兩方共にくわつと閉き。小篠の

坂を杖もつかずつと下る。お山の衆が

考へ。ア、有難い。此秋から世の中直る御  
告。あれ合點いかぬか。小さい盲は小めく  
ら。則ち米藏開いて。易々と下る坂はさが  
り口との教へ。地手すきなら夕方おじや。

色々お山の咄して旅の疲を晴らさうぎやて

い。フシギやていく〜とのゝめきける。親

徳兵衛走り出で。若い衆下向か殊勝にごさ

る。調こちのどろめは山上参りの行者講  
と。今年も身どもか手から四貫六百。順慶

つてどれどこに迎ひにも出居らぬ。神佛の罰も思はぬどろく者。友達がひに引締しめて意見。頼みまするといふ所へ。奥より母親兩手に茶碗。なうく目出たい下向。マア一ツづつ参れ。こちの與兵衛が山土様へ嘘ついた其の咎めか。妹娘おちが十日ばかり風ひいて枕上らず。變へても今に熱がさめかね。節句は近付く聲を入れる、談合極り。先からは急いでくる何かに付けて女夫の苦勞。みんな與兵衛ののらめが行者様へ嘘ついた祟り。お若い衆お詫の祈禱頼みますと。しみく語れば講中の先達。いやくお山の祟りなれば與兵衛に間が當る筈。役の行者ともいはる、佛が。若輩らしうなんの脇がかりなされう。娘御の熱病は又外のこと。其の様な煩ひには藥も醫者も入らぬ事。皆様知らずか。あんまり奇妙で異名を。白稻荷法印と申す今の世の流行山伏。與兵衛も定めし知つてるよ。此の法印を頼めば本復はたつた

一加持。是からすぐ立寄り。頼むに否は有るまいと語れば悦びナウく呑い。これも行者のお知らせ私は醫者殿へ参ります。是でゆるりとお休み。く立出づればいや我々も面々の。親々妻子の顔も見たし。互に無事で悦びの貝吹く降伏惡魔を拂ふ眞言の。聲もちりくばらくぎやてい。おんころく別に歸りけり。逆な弟に似ぬ心。順慶町の兄河内屋太兵衛用有りけにも浮かぬ顔付。太兵衛來てか。おちが氣色見舞か。書出し何か忙しい時分。見舞には及ばぬ事と。いへば太兵衛そば近く寄り。母には道でお目にかゝり。立ちながら委しう物語り致せしが。高槻の叔父森右衛門様から。たつた今飛脚の狀に。もつけな事がいって來ました見さつしやれ。跡の月御主人の供して野崎参りの折ふし。極道の與兵衛めも参り合せ。友達喧嘩に摺み合ふ拍子。御主人へ段々の慮外。當座に與兵衛めを切殺し主も腹切る合點の所。御主人の御料簡おとなしく。事相濟み歸つて後。御家中町屋は沙汰。のめめと面さけて奉公ならず。暇を願ひ没人し四五日中に大阪へ下り。再び侍の立つべき思案せずば此の分で刀はさ、れぬとの體なりと。いふよりはつと膝を打ち扱こそな。どこぞで大事に下さうと思ふつほ。かて、加へておちが煩ひ叔父の難儀。まだ此の上にとろめが何をしなさうやら。分別に能はぬと天窓を掻けば。イヤ分別も何も入らぬ。追出してのけさつしやれ。親父様が手緩い。私と與兵衛めは。お前の胤でないとして餘り御遠慮が過ぎます。腹に宿つた母ぢや人と連添ふお前。眞實の父上と存する。地やがて聲を取る程背丈のびた。おちかはぶちた、きなされても。暗情嫩めには拳一つ當てず増長させ。萬事に遠慮が皆身の仇。た、き出して此方へ遣さつしやれ。どれぞひどい主にかけ煩め直してくれませうと。いへば親は無念顔。獄地油殺女

惜しい。尤續父なればとて親は親。子を折檻するに遠慮はない筈なれど。そなた衆兄弟は身どもが親方の子。親旦那往生の時。は。そなたが七つのらめは四つ。ほん様見様。徳兵衛どうせいかうせいというたを彼奴がきつと覺えてゐる。かゝも始めはおか様の内儀様のというた人。叔父森右衛門殿が料簡で。そちが家を見捨て、は後家も子供も路頭に立つ。とかく森右衛門次第に成つてくれとだん／＼の頼みゆゑ。地親方の内儀と此の如く女夫になり。親方の子を我が子として守り立てしかひ有つて。其方は自分の獨稼もめさるゝ。與兵衛めに商の手をひろげさせ手代も置き。土藏の一軒も建てる様にとあがいても。尻のほどけた錢さし。箆で水波む如く跡からぬけ。壹匁儲ければ百匁遣ふ根性。意見一言いひだせば千言で言ひ返す。エ、元が主筋下人筋の親と子。釘ごたへせぬ管身の境界が口惜しいと齒を嚙ひしければ。■サアこなたの其

の正直を見抜いて。どろく者めがしたいがひに踏み付ける。親父様のかけでこそ。親子三人橋にも寝ず。人の門にも立たず名跡を立てて下された。其の恩徳は本の親にも變らずと毎度母も其の悔み。子供に遠慮有るからは。現在腹に宿した母にも氣兼ね有るかと思はぬ心置るゝ。因果曝しの物にならずに飽き果てた。太兵衛頼む。江戸長崎へも追下し死にをらば死に次第。再び面を見たい。微塵も愛着残らぬと。如來かけての母が言ひ分からは何御遠慮。■勤當なされと評議の聲に目を覺し。ア、衛ないか、様／＼か、様はまだ歸らずかと。おちかが苦しむ屏風の内。門には物もう。河内屋徳兵衛殿は此方か。山上講中頼みにつけ。稻荷法印御見舞申すと案内す。扱はおちかが祈禱なさるゝか一段々々。私は高槻の返事が急ぐ。お暇申すと表に出で。徳兵衛宿に罷在る早々御出忝し。あれへお通り遊ばせ

こそ。フシ通りけれ。踏みしめもなく。世の中を。滑り渡りの油屋與衛兵齋溜錢は色狂ひ。押り取られて元も利も糟も残らぬ油桶。フシ重けに見せる。汗は夏。中は涼しき空樽を。になうて。フシ宿へ歸りしが。■ヤ珍しいお山ぶ。此方は見知つた白稻荷殿。妹が病氣祈りの爲か。あの憑物が。そなた衆の祈りで退いたら此の與兵衛が首がけ。母ぢや人は藥取りにか。着婆でもいかぬ死病いはれぬ氣骨折らるゝ。ヤこれ親父殿。おちかが頼みより何より大事が有る。其の當座に母ぢや人には言うたれどそれよりはつたりと打忘れ。今日ふつと思ひ出し商賣止めて歸つた。跡の月野崎で叔父森右衛門様に行逢ひ。わざ／＼飛脚もやる所幸の便親達へいうてくれ。主人の銀四つ寶三貫目餘り引負ひ。此の節季にたてねば切腹か縛首一生の無心。兄太兵衛は養理も法も知らぬ奴。沙汰無しに三貫目調へ。與兵衛に持たせて下されと段々の言傳。■二貫目や三



貫目で叔父に腹切らせて。こなた衆の外間世間が立つまい。けふは二日際というて明日明後日。萬事を差置き今日の中三貫目調へて渡さつしやれ。明日夜明けに、駈出せば

正午迄に往て戻ると。たつた今直筆の叔父の文の裏表。憎く可笑しく。圓いかな叔父

でも。主の金引負ふ様な待。腹切らせたがまし。何ぢやごたくさんに三貫目。三匁もおじやらぬ。お主が商賣去年から一文も見せぬ。算用したら三貫目や四貫目は残る筈

やりたくば其の金やれ。追付け聲を呼び入るる。大事の娘が病氣鈍な評定する際がない。ヤ法印様お待ちどほ。おかちが容態

御覽なされ下されと餘の事いうて取り合はず。ヤ、く。手柄に聲が呼ばれうば呼う

で見や。見物せうと親の前に足踏伸し。算盤枕の胸算用。フシぐわらりと違うて見えに

けり。父がそろくだき起すおかちが顔の面憂れ。法印とつくと見。ム、年はいくつ。十五。病みつきは跡の月十二日。ム、

薬師如來の縁日。十五は阿彌陀と地懐中の書籍くりひろげ指を折り。仔細らしき聲付。四そもく法藏比丘の淨瑠璃に曰く。

阿彌陀と薬師は御夫婦と云々。則ち此の病は一時も早く婚殿を呼入れ。夫婦に成り度

と思ふ氣病に。地ちと外の魅入有りといふより徳兵衛もつとも顔。法印圖に乗り。

稻荷大明神の使者白狐の致へ。髪筋程も違はぬ祈り加持も藥同然。神佛にも其の役々。熱病さましひやすには。比叡山の廿一社。温むるには。フシ熱田明神。江戸あたまの病

は愛宕權現。足の病は阿闍佛。走り人盗人。動かせぬはフシ不動の鐵縛り。咳氣を祈る

は風の宮。老人達の老病には白髭明神白髭薬師。若衆の病のナホス祈りには大慈大悲の

地藏菩薩。骨牌の繪のつく祈禱に麻布の明神釋迦牟尼佛。どう取の祈りは。四三五六社大明神。八講七の社。別けて此の法印

たい祈りには。強氣に。上り高天が原の八百萬神。はたした衆の下りを祈るは。高き

お山を時の間に麓に下る。嵯峨の釋迦。フシ安井の天神。コハリ持とはかと兩方一度の祈

りには。高からず安からず中を取つて河内の國。フシホス高安の大明神。法力のあらた

な事棚な物取つて來る如く。禮物は大方三十兩。何時でも受取る。地いで一祈りと

錫杖振立ていらたか數珠。フシさらりくと押揉んだり。地印をも未だ結ばぬに病人

重たき顔を上げ。なう祈りも入らぬ祈禱もいや。おかちが病なほすには聲取の談合や

めてたも。あの與兵衛が若氣故借錢に責めらる。其の苦しみが其土の苦患是ぞ阿責の責と成る。流れ勤めの女子なりとも。與兵衛が契約の思ひ人を讀出し嫁にして。此

驚き色逢へ。法印少しも臆せず。汝元來何處より來るとつく去れ。行者の法力盡くへきかと鈴鐺杖をちりゝんがら。フシ急如律令とせめかくる。地與兵衛

つくと起き。何を知つて去れ。どう山伏置きをれと落間にがはと突落せば。ヤア山伏の法を知らぬか。驗を見せずば置くまじと。駈けあがりんぐ鈴りんぐ。引き

きずりおろせば又駈け上る不動の眞言どたくたぐわつたりばつたりだ。引きずりおろされ山伏も錫杖がら。フシ命から歸りける。地與兵衛親の側に膝まくり。是親父殿。今の漫言耳へ入れたか。死んだ人を迷はせ地獄へ墮しても。此の與兵衛

か好いた女房持たせ。所帯渡す事はいやかならぬか。ヤイ露い。あたり隣も有るぞかしよつ程にはたへあがれ。此の徳兵衛は。死んだ人の跡式取らいでも。五人七人はゆるりと過ぎる術知つたれど。年忌命日も弔ひ。地獄へ墮さず迷はせまい爲に名跡繼いで苦勞する。和御寮が好いたお山請出し女房に持たせ。半年も立たぬ中。所帯破つて

親方の甲ひもならぬ様にはえせまい。さては是非取つて。妹に所帯渡すな。地ヲヲ渡す。ムウよういうた道知らずめと立上り。俯向けに踏みのめらし。肩骨脊骨うん

くく踏みつくる。なう悲しやあさましい兄様と。妹が縋れば。おかし構ふな。あいつが腹のいる程。存分に踏ましやくと。身も働かず座も去らず。妹堪へかね餘りな兄様。わしは何も知らぬ者死靈の憑いた顔して此のよに。いふてくれ。それからは商賣も精出し。親達へ孝行盡し逆ふま

いと誓文立て。それが嬉しいばかりに病みほうけた此のなりで。怖い。恐ろしい死人の眞似して嘘つかせ。父様を踏んづ蹴つそれが親孝行か。年寄つた父様目でも眩うたら。それは聞かず事ぢやないぞと縋り取付き泣き喚けば。いいき女郎め。ぬかすまいと誓文立て。口がため。地につく

いほけた。死靈より此の與兵衛といふ生靈の苦み。覚えてをれと同じくがはと踏み伏せたり。病み疲れた妹を踏殺すか畜生めと。取付くて。親はつたと蹴飛ばし。腹のいる程踏めというたな。是で腹をいるわいと。顔も頭も別ちなく散々に踏む最中。母立歸り。はつとばかり藥投棄て。與兵衛が響引

つつかんで。横投にどうとのめらせ乗りかかり。目鼻もいせぬ握り拳。め提婆め。いかな下人下郎でも踏むの蹴るのほせぬ事。徳兵衛殿は誰ぢや。己れが親の今に其の鴈が。腐つて落ちると知らぬか罰當り。おともしやく。腹の中から盲で生れ手足不具な者もあれど。魂は人の魂。己れが五體どこを不足に産み付けた。人間の根性なせさけぬ。父親が違ひし故母の心がひがんで。悪性根入る、といはれま

いと。さす手引く手に病の種。己れが心の剣で。母が壽命を削るわい。向己れ先度も高槻の叔父が。お主のかねを引負ひし

度も高槻の叔父が。お主のかねを引負ひし

度も高槻の叔父が。お主のかねを引負ひし

度も高槻の叔父が。お主のかねを引負ひし

とようもく此の母をぬくくくと騙した  
なア。たつた今兄太兵衛に行逢ひ。己れが  
野崎のあばれ故叔父は侍一分立たず。浪人  
して大阪へ下るとの便。己れが嘘が顯れた。

其の時母がつかくと親父殿へ話し。跡で知  
れては扱は親子のいひ合せと疑はれ。夫婦  
の義理も飲け果てる。地内でも外でも己れ  
が噂ろくな事は一度も聞かぬ。其の度ごと  
に母が身の肉を一すづつ。そいで取るやう  
な因果ざらしめ。半時も此の内に置く事な  
らぬ。勘當ちや出てうせう。出されくと  
ぶつつくはせつ。たたく片手に押し拭ふ涙  
フシ手のひまなかりけり。此の與兵衛がこ  
こを出てどこへいく所がない。ヲ、己れが  
好いた。お山が所へ出てうせうと小腕取つ  
て引出す。ナウ兄様追出しわしは此の跡取  
る事いや。こらへて進せて下されと取りつ  
けば何知つて退いてをれ。是徳兵衛殿。き  
よろりと見てゐて誰に遠慮。エ、齒がいゝ  
た、き出してくれんと。枴押つ取り振りあ

ぐればひらりと外しひつたり。此の枴で  
和御寮を撲つとはたくと打ちつくる。徳  
兵衛飛びかゝり枴もき取り。續け打にセツ  
八ッ息もせさせず撲ちする。はつたと腕む  
目に涙。コヤイ木で造り。土をつくねた人  
形でも。魂入るれば性根有る。耳あらば  
よう聞け。此の徳兵衛は親乍ら主筋と思ひ。

手向ひせず存分に踏まれた。腹を借つた生  
みの母に今の態。脇から見る目も勿體なう  
て身が顛ふ。今撲つたも徳兵衛は撲たぬ。  
先徳兵衛殿冥土より。手を出してお打ちな  
さるゝと知らぬかやい。おかちに入掣取る  
といふは跡方も無い事。エ、無念な。妹に  
名跡繼がせては口惜しと恥入り。根性も直  
るかと思案しての方便。あの子は餘所へ  
嫁入さする氣遣すな。他人どし親子と成る  
はよくく他生の重縁と。地かはいさは實  
子一倍。痲瘡した時日親様へ願かけ。代  
代の念佛捨て。地百日法華に成る是程よろ  
づ面倒見て。大きな家の主にもと。丁稚も

使はず肩に棒稼ぐ程遣ひほつく。己れ今の  
若盛。一働かせぎ五間口七間口の門柱  
の。主にと念願を立ててこそ商人なれ。た  
つた一間真半の門柱に念かけ。母に手向ひ  
父を踏み行く先偽り騙ごと。其の根性が續  
いたら門柱は思ひもよらず。獄門柱の主に  
ならう。親は是が悲しいとわつと叫び。入  
りければ。地エ、もどかしい徳兵衛殿。石  
に謎かける様に口でいうて聞く奴か。出て  
うせく。うぢくひろがば町中寄せて追  
出すと。又押取つて母がつつ張る枴の先。

怖い目知らぬ無法者。町中といふにぎよつ  
としてと胸つきたる怪顔。なう兄様出し  
てわしは跡に残らぬと。縮る妹を押止め。  
きりくうせう。枴がくらひ足らぬかと。  
ふり上げこすり出されて。越ゆる鬮の細溝  
も。ホシ親子別れの涙川。徳兵衛つくく  
と後姿を見送りて。わつと叫び聲を上げ。  
あいつが顔つきせい恰好成人するに従ひ。  
死なれた旦那に生寫し。あれあの辻に立つ

たるなりを見るにつけ。眞兵衛めは追出さず。旦那を追出す心がして。勿體ない。悲しいわいのと、フシどうど伏し人目も。恥ぢず泣く聲に。憎い／＼も母の親嗜む涙堪へかね。見ぬ顔ながら伸び上り。見れどもよその繪幟ゑぼしに影も。隠れて 三章

下之卷

齊きなれし。フシ年もひさしの蓬蒿よもぎやう蒲は家毎に。幟の音のざはめくは、フシ男子おのこ兒持の印しるしかや。娘ばかりの豊島屋は亭主は外の掛一まき。内のしまひと小拂こはらと油賣あぶらつたり舞うたりに。三人の娘の世話。まあ姉からと櫛くし留取出しとき櫛くしに。色香揉み込む梅花の油。歌女はヤ髪より形より。心の垢を梳すき櫛くしや。フシ嫁入先は。地夫の家さとの住家すまがも親の家。鏡の家の家ならで家といふ物なけれど、世にゆるし定めけん。長五ながご月五日の一夜さを女の家といふぞかし。身の祝月祝日に、フシ何事なかれ。なで付けて。髪引く湯津ゆぢの妻櫛の齒のハア悲し。一枚

折れた。あきれてとんと投櫛は。別れの櫛とて忌む事をと。口にはいはず氣にかゝるフシなんぞのつけの小櫛こくしかや。掛かけも十に七左衛門大方寄つて中戻り。調しらべア、思ひの外早い仕舞。内の拂もさらりと仕舞ひ。兩替町の錢屋から燈油ともし二升梅花一合。今橋の紙屋から通ひ持ちて燈油一升。當座帳に付けて置く。まあ洗足せんそくして早うお休み。明日はとうから禮に出さしやんせ。いや／＼早う休まれぬ。天満あまなの池田町へいかねばならぬ。フウ氣ふうき疎そといもうよいわいの。池田町は北のはて。近所の掛さへ寄つたらば過ぎての事。こな人何いやる。節季に寄らぬ金の過ぎて寄つた例たとはない。今日暮れてから渡さうと詞番ことばんうた。ついで一走りいてこう。此の打飼うちかひ袋に新銀五百八十目。財布の錢も戸棚へ入れて錠卸しや。やがて歸ると立出づる申し／＼。調しらべそんなら酒一ツ姉。それ燭して進すすじやと。地立つて戸棚へ徳利とくからちろりへ移せば。アこりや／＼。調しらべ燭ろうせいで大事

ない。看も盃も入らぬ。中なかがさ添へて持つてこい。夜が短い氣がせくそこからつけ。地ちあいとはいへど坐しては手も届かねば立ち上り。つぐも受くるも立酒をお吉見付けてそりやなんぞ。調しらべいま／＼しい子供は頑ごつ是もないにせい。立酒飲んでたれを野送り。ア氣味わると。地ちいはれて夫もちやつと腰かけ取直し。掛乞かけごひに行く門出にはか行の立酒。此の世に残らぬ／＼と。祝ふ程なほあはれ世の、フシ永き別れと出でて行く。母を見習ふ。姉娘。地ちよるの衾かぶとをしき／＼に。おござよ枕まくらよ蚊帳かやの吊手つりては。長けれど、地ち届かぬ足のフシ短夜みぢなや。地ちおでんをろくに寝させて。かゝ様もちとお休みといひければ。調しらべヲでかしやつたと、様もまだ遅かる。蚊帳の内から表はかゝが氣を付ける。わが身もね、しや。いえ／＼、地ちわたしはねたうござらぬと。フシいひつゝ、眠るもおとなし。地ち此の節季越すに越されぬ河内屋與兵衛。手筈てはづの合はぬ古拾ふるもはせ。心ばかりが廣袖ひろそでにさけ

たる油の二升入。一生さゝぬ脇差も今宵鑓のつまりの分別。勝手知つたる豊島屋の。門の口覗く後より。與兵衛ぢやないか。ア與兵衛ぢやが誰ぢやと振返れば。上町の口入綿屋小兵衛。アこなたは順慶町へ行けば。本天満町親御の所へといはるゝ。親御へ行けば追出したこゝにはるぬとある。貴様は留守でも判は親父の判。新銀一貫目今宵延びると明日町へ斷る。ハテこゝな人はいきかたの悪い。手形の表こそ一貫目正味は二百目。今宵中に濟せば別條ない約束ではないかいの。さればあすの明六ツ迄にすめば二百目。五日の日がよつと出ると一貫目。もと二百目を一貫目にして取れば。こつちの得のやうなれど。親父殿に非業の金を出さずが笑止さに。こなた最辰でせつくぞや。今宵きつと濟ましや。小兵衛こりや念入るゝな。河内屋與兵衛男ぢや男ぢやあてが有る。雞の鳴く迄には持つていく。眠たくと待つてもらを。はて今宵すま

して入用なれば。あす又すぐに貸すわいの。こつちも商賣一貫目や二貫目は何時でも。其の男氣を見届けたと。詞で與兵衛が首しめる。フシ綿屋小兵衛は歸りけり。見事に請合は請合ひしが。一錢の當もなし茶屋の拂ひは一寸のがれ。抜きさしならぬ此の二百匁。有る所には有らうがな。世界は廣し二百匁などは。誰ぞ落しさうな物ぢやと。後を見れば小提灯。河といふ小文字はこつちの親父南無三寶と。鎖いたる店に平蜘蛛のフシひつたりと身を付け身を忍ぶ。徳兵衛は氣もつかず豊島屋のくゞりそつとあけ。七左衛門殿お仕舞かとおつと入れば是はくゞ徳兵衛様。こちのはまだ仕舞はず天満の果迄いかれます。わたしは取紛れお見舞も申さぬに。ようこそ。此の際は與兵衛様の事につき。蚊帳より出づればさればでござんしよと。蚊帳より出づればさればくゞ。こなたは幼い娘御達の世話。我等は成人の與兵衛に世話をやく。いづれの道

にも子に世話をやむは親の役。苦勞とも存ぜねども。引付けて一所に在る中は氣も落付く。あの様な無法者を勘當すればやけを起しあす火に入るも構はず。謀判一貫目の銀に十貫目の手形して。一生の首繋がるゝ例も有る事と思ひながら。生の母の追出すを。繼父の我等輕薄らしうとめられず。聞けば順慶町兄が方にゐるとやら。もし此の邊へうろたへて見えましたら。七左衛門殿夫婦言ひ合せ。親は合點。随分母に訛言致しどしやう骨入れかへ。再び内へ戻る様に御意見偏に頼み入る。こちの女房おさはが一家一門皆侍。其のならばしか思ひ切つては見かへらず。義理固い生れ付それに似ぬ道樂者。且那も行儀つよく。義理も情も知つたる人。二人の子供に心を盡すは皆故旦那への奉公。今與兵衛めを追出し。一生荒い詞も聞かぬ親方に。草葉の蔭より恨みを受くる無果報は此の徳兵衛一人。推量なされお吉様

と。煙草に涙スシ粉らして咽せかへる。こ

を道理なれ。ムウ思ひやりました。こち

のも追付け歸られう。違うてお話しな

されませ。いや〜いつかたも今宵のこと

萬事のお邪魔。是此の錢三百。女房が目顔

を忍びつい懐中へ入れて出た。與兵衛めが

うせたらば追付け暑氣に赴く。きつぱりと

肌物でも買ひをれと。ゆめ〜我等の名

を出さず。七左殿の心付か。どうなりとも

御氣轉頼み入ると差出す。後の門口お吉

様お仕舞かと。音づる、は女房おさはが聲

徳兵衛びつくり。バツ逢うては氣の毒隠れ

たい。率爾ながら御免なされと隠る、蚊帳

の後影。これ〜徳兵衛殿我が女房に隠

る、とは何事と。聲かけられて夫も敗亡

お吉もどまくれ挨拶なく。外には與兵衛サ

ア母のかまがわせた。何いはる、と極の孔

ア耳を付けてぞ聞きたる。女房お澤腰

打掛け。ナウ徳兵衛殿七左衛門様もお留

守といひ。内の事はそこ〜に。いつ逢は

うとまゝの向ひとし。互に忙しい際の夜さ。

こゝへは何の用が有る悪性する年でもなし。

ムウ又與兵衛めがこと悔みにか。いかに繼

しい子なればとてあんまりに義理過ぎた。

眞實の母が追出すからは。こなたは名の立

つ事はない。此の三百の錢のらめにやるの

か。つね〜に身をひづめ。始末して彼奴

にやるは淵へ棄つるも同然。地其あまやか

しが皆養飼。此の母はさうでない。サア勤

當といふ一言口を出づるがそれ限り。紙衣

着て河へはまらうが。油塗つて火にくばら

うが。うぬが三昧。悪人めに氣を奪はれ。

女房や娘は何になれ。サア〜先へいなつ

しやれと。引立つる袖を振放し。エ、か

かむていぞやさうでない。生れ立から親は

ない。子が年寄つて親と成る。親の始は

皆人の子。子は親の慈悲で立つ親は我が子

の孝で立つ。此の徳兵衛は果報妙く今生

で人は使はずとも。いつでも相果てし時

の葬禮には。他人の野送り百人より。兄弟

の男子に先與後與昇かれて。あつばれ死に

光やらうと思つたに。子は有りながら其

のかひなく無縁の手にかゝらうより。いつ

そ行倒れの釋迦荷ひが。まして。フシおぢや

るわと又むせ。かへるぞ哀れる。ア與

兵衛めばかりが子ではない。兄の太兵衛娘

なれどもおかはこなたの子でないか。地

サア〜早う先へと押出す。ハテいぬる

なら連立たうそなたもおじやと引立つる。

地母の袷の懐中より。板間へぐわらりと落

ちたはなんぞ。粽一把に錢五百。なう情な

や恥かして我が身を覆ひ押隠し聲を上げ。

徳兵衛殿眞平免して下され。是は内の掛の

寄り與兵衛めにやりたいばかり。わしが五

百盗んだ。廿年添ふ中隔。心隔ての有るや

うに情ない。詞たとへあの悪人めがお談義

に聞く様な。地周利榮特の阿房でも阿闍世

太子の鬼子でも。母の身でなんのにくから

う。いかなる悪業惡縁か胎内に宿つてあの

通りと思へば。不便宜可愛さは父親の一倍

なれども。母が可愛い顔しては隔てた心に。あんまり母があいたてない強張が強うて。いよ／＼心が直らぬとさぞ憎まるゝは必定と。地わざと憎い顔して撲つつ叩いつ追出すの勘當のと。憎う辛う當りしは繼父のこなたに。可愛がつてもらひたさ。是も女の廻り智恵免して下され徳兵衛殿。わしに隠してあの錢をやつて下さる志。詞ではけん／＼と慥食にいたれど。心で三度ッ頂きし。何を隠さうあいつは立派好もするやつ。取りわけ祝ひ月鬢付元結をとのへ。人交りもしたからう。生れて此の方節句々々祝儀缺かぬに此の月ばかり。身視ひもしてやりたさ。見苦しい此の恥辱をさらずも。お吉様顔んで届けんため。地まだ此の上に根性の直る薬には。母が生臈を煎じて飲ませといふ醫者あらば。身を八裂も厭ねども。一生夫の錢かね文字半錢ちがへぬ身が。子故の間に迷はされ盗して顯はれた。恥かしゆゑざるとばかりにてわつと叫び入りければ。道理々々と夫の歎き子を待つ者は身にこたへ。行く末思ふはお吉の涙折からになく蚊の聲もフシいと涙を添へにけり。地ヤ祝ひ日に心もない泣き喚き不調法。其の錢もお吉様頼み。與兵衛にやつてお暇申しやと。地いへども女房涙にくれ。こな様のやつて下さる其の深い志に。盗んだ錢がなんとやらりよ。ハテ大事なひらにやりや。地いや免して下されと。女夫が義理のフシやるかたなさお吉も。涙止めかね。地ア、おさは様の心推量したやりにくい筈。こゝに捨て、置かしやんせ。わしが誰ぞよさをな人に捨はせましょ。ア、忝いとものお情。此の察も誰ぞよさをな犬に。地喰はせて下さんせと。ムエテ又泣き出す兩親の。地心隔てぬ潜戸も子の不孝より落ちたる福。オトリ開けて、夫婦は歸りけり。地父母の歸るを見て心一つに打點頭き。脇指抜いて懐中にさいたる潛さらりとあげ。つつと入るより胸も裾も落し付け。

七左衛門殿はいづかたへ定めて掛も寄りましよと。地餘所の方からうら問ひける。誰かとこそ思つたれ與兵衛様か。こな様は仕合な。後ともいはずよい所へござんした。是此の錢八百此の察こな様へやれと天道から降りました。頂かしやんせ。地なんほ浪人でも際の日寶。まんが直ろと差出せば。地與兵衛ちつとも驚かず。是が親達の合力か。ハテ早合點な追出した親達が。なんのこな様へ錢かねをやらしやんしよ。いや隠さしやるな。先から門口に蚊にくはれ。長々しい親達の愁歎聞いて。涙をこほしました。ム、そんなら皆聞いてかよう合點参りしか。他人でさへ目を泣き服した。此の錢一文も徒には成るまい。地肌身に付けて一稼お二人の葬禮に。立派な乗物に乗せうといふ氣がなければ。男でも枕でもない。それを御背きなされたら天道の間佛の罰。日本の神々のさか罰が當つて。將來がようあるまい。先づ頂いてと差出せば。

間いかにもくよう合點しました。只今より眞人間に成つて孝行盡す合點なれども。肝腎お慈悲の錢が足らぬ。というて親兄に言はれぬ首尾。こゝに賣溜掛の寄り金も有る筈。新でたつた二百匁ばかり。勘當のゆりる迄貸して下され。それくく。奥を聞かうより口聞けどこに心が直つた。嘘にも金を貸してくれとはいはれぬ義理。世間の義理を缺いても。金借つて悪性所の拂ひして。跡からだんく行かうでな。成程金は奥の戸棚に上銀が五百匁餘り。錢もありは有りながら。夫の留守に一錢でも貸すことはいかなく。地いつぞや野崎参り着る物洗うて進ぜたさへ。不義したと疑はれ。言譯に幾日か、つたやらなうとましやく。歸られぬうち其の錢持つて早ういんで下さんせと。いふ程側へにじり寄り。不義になつて貸して下され。ハテならぬといふにくどい。くどういふまい貸して下され。イヤ女子と思つてなぶらしやる

と聲立て、わめくぞや。ハテ與兵衛も男。二人の親の詞が心根にしみ込んで悲しいもの。なぶるの侮るのといふ所へゆくことが。何を隠しませう跡の月の廿日に。親仁の謀判して上銀二百匁。今晩切に借りました。ヤまあ後を聞いて下され。手形の表は上銀一貫目。借つた金は二百匁。地明日になれば手形の通り一貫目で返す約束。それよりも悲しいは親兄の所はいふに及ばず。兩町の年寄五人組へ先様から斷る筈。今に成つて此金の才覺。泣いても笑うても叶はぬ事。自害して死なうと覺悟し。これ懐中に此の脇差はさいて出たれども。只今兩親の歎き御不便がりを聞いては。死んで此の金親父の難儀にかくること。不孝の塗上げ身上の破滅。思ひ廻せば死ぬるにも死なれず。生きてはゐられず詮方なきに見かけての御無心ぞや。なければ是非もなし有る金。たつた二百匁で與兵衛が命をついで下さるゝ御恩徳。黄泉の底迄忘れうかお吉様。どうぞお吉喫驚。地今ののはなんぞ與兵衛様。地イ

貸して下されといふ目の色も誠らしく。さうした事もと思ひ乍らかねての偽り是も亦。其の手よと思ひ返して。地フウ、まがくしいあの嘘わいの。まだ尾緒付けていはしやんせ。ならぬというてはきつうならぬ。是程男の冥利にかけ。誓言立て、も成りませぬか。ハアはあなんとせう借りますまいと。地言ふより心の一分別。地そんなら此の樽に油二升取りかへて下さりませ。地それは互のあきなひ内貸し借りせいで世が立たぬ。成程詰めてと賣場にかゝり。消ゆる命の燈火は油量るも夢の間と。しりて升取り柄杓取る。後に與兵衛が邪見の刀抜いて待てども見す知らず。地祝うて節句もお仕舞なされ。こちらの人もわり入つて相談。有る金なれば役に立てまい物でなし。地五十年六十年の女夫の中も。ま、にならぬは女の習ひ。必ずわしを恨んでばし下さるなといふ内に。燈油に映る刃の光



ヤなんでもござらぬと脇指うしろ後に押隠す。詞  
それ／＼きつと目もすわつて。なう恐ろし  
い顔色かほいろ。其の右の手こゝへ出さしやんせ。

地おつと脇差持ちかへて是見さしやれ。詞  
何もない／＼と。地いへどもお吉身もわな

／＼。詞ア、こな様は小氣味のわるい。必  
ず側へ寄るまいと。地跡しさりして寄る

門の口。あけて逃げんと氣を配れど。詞ハ  
テきよろ／＼何恐ろしいと。地つけ廻し

／＼出あへと喚く一聲。二聲待たずとびか  
かり取つて引きしめ。詞音ほね立つるな女

めと。地吠うなのくさをぐつと刺す刺されて  
惱亂手足をがき。詞そんなら聲立てまい。

今死んでは年はいかぬ三人の子が流浪す  
る。それが可愛い死にともない。金も入

る程持つてござれ。助けて下され與兵衛様。  
ヲ、死にともない筈尤々。こなたの娘が可

愛い程。おれもおれを可愛いがる親父がい  
としい。金拂うて男立てねばならぬ。諦め

て死んで下され。口で申せば人が聞く。心

でお念ねん佛南無阿彌陀。地南無阿彌陀佛と引

寄せて右手より左手の太腹へ。刺いては制  
り抜いては切り。お吉を迎ひの冥土の夜風。

はためく門の轆の音爛おとちに賣場の火も消々  
て。庭も心も暗闇に打ちまく油流るゝ血。

踏みめめらかし踏みすべり。身内は血汐の  
赤面赤鬼。邪見の角を振立てて。お吉が身

を裂く劔の山目油の地獄の苦しみ。軒の  
葛蒲せむぎのさしもけに。千々の病はよくれど

も。過去の業病通れ得ぬ。葛蒲刀に置く露  
の玉も亂れて。三息さん絶えたり。地日頃の

つよき死顔しやう見て。ぞつと我から心も後れ。  
膝ひざ節がた／＼がたつく胸をおしさけ／＼。

さけたる鍵を押取つて覗けば蚊帳のうちと  
けて。寝たる子供の顔付さへ我を睨にらむと身

も顔へば。つれてがらつく鍵の音頭かぎの上に  
鳴雷の。落懸おちるかと肝に徹とへ。戸棚にひつ

たり引出す打銅袋。上銀五百八十匁宵に聞  
いたる心あて。捻ねじ込み捻込む懐中の。重さ

よ足もおもくれて。白氷を踏む火焔踏む。

此の脇差は栴檀せんだんの木の橋から河へ。沈む來

世は見えぬ沙汰。此の世の果報の付きどき  
と内をぬけ出で逸散に。足に任せて。三息

おしてらや。フシ難波の春は。地京に負け  
京は難波の景色より。劣る水無月夏神樂。

オクリ富士も。及ばぬ戀の山。第一日本の名  
所なり一年三百六十日。紋日が三日足らぬ

とて亡八は歎く。女郎はそれほど客に厄介  
を。變換へんへに行く客も有り。好んで頼み

頼まるゝ。客は一きはフシいかつげに。駕  
籠を飛ばする揚屋客。扇で忍ぶ茶屋の客。

一座遊びは女房めく。肩で風切る空ぞめ  
き。位くらを問ふは田舎客。寝て物語る馴染

客。太鼓過ぎてと。啼くは女郎の手もめの  
振舞客。親。親方の没却ぼつ有り。我が身上的

没却ぼつ有り飛脚もまじり行き通ふ。道の間を  
暫くも口たゞ置おくは恥らしく。役者物真似

地の物まね。小唄淨瑠璃口戯くわ詠えい西口東口々

に。行くも歸るも障りなきゆふべくの大  
寄せは。フシゆたか成る世のいさをしなり。  
地されば山本森右衛門與兵衛が身持の知ら  
せに驚き。暫く主人に暇乞ひ大阪へ立越え  
しが。女殺して金取りしも慥にそれとは知  
れねども。衆目の見る所與兵衛に指さす身  
の放埒、若しやと詮議も寄りつかねば先づ  
尋ねくるわの内。東口にて尋ねしにそ  
んじよそことは教へしかど。いづれも同じ  
局のかゝり。こゝや備前屋。是や教へし備  
前屋かと。見まがひ佇みふる折ふし。手に  
かさ高な文持つて西の方から来る禿。これ  
く物問はう。備前屋と申す傾城屋はい  
づかた。其の御内に松風殿と申す傾城。御  
存じならば教へたべ。我等當所不知案内。  
頼み入るとぞ堅くろし。フウ仔細らしい物  
のいひ様。備前屋は此の家。西の端に戸の  
さいた。客の有る局が松風様でござんす。  
コレお待様。左の足上げさんせ。ソレく  
又右の足も上げさんせ。ヲ、よう上げさん

した。いかい世話のと。地なぶつて、フシ  
んしやんゆき過ぐる。所がらとて人になれ。  
エ氣軽いやつと打笑ひ。教へし局に立寄れ  
ば。内に火影は有りながら戸口ひつしと立  
てつめたり。扱こそ客は與兵衛に極まる。  
出づるを捕へ逢はんものと。待つ間程なく  
戸を開き。編笠かづき立出づるすかさず  
んすとひんだかゆる。女郎も續いてこりや  
誰ぞ。率爾せまいと引分くる。苦しから  
ず率爾でない。己れ與兵衛め隠れたならば  
逢ふまいかと。笠引つちぎり顔見合せヤア。  
こりや與兵衛でない人違へ。まつびらく  
面目なやと腰折つて手をすれば。地彼奴も  
恐びの戀やらん。頷くばかり顔隠し、東の  
方へ走り行く。河内屋與兵衛深い中と音  
に聞く松風殿。昨日にも今日にも與兵衛は  
こゝもとへ參らずか。氣道のない用事有つ  
て尋ぬる者。隠されては彼が爲ならず。サ  
ア眞直が聞きたいく。まちつと先に見え  
まして。是から直に會根崎へかなはぬ用と

てござりんした。なんぢや會根崎へ南無三  
寶遅かつた。拙者も跡から參らば成るま  
い。序にも一つ尋ねませう。五月の節句前  
か。後か。六月へ入つてはやうく六日。  
其の間にこゝもとで金銀の拂ひ。金澤山に  
使うた事はござらぬか。是も隠さずお知ら  
せなされ。どうござんすぞ金の事は存じや  
せぬ。遣手にお問ひなさりんと。地いひ  
すて局にフシついと入る。是は我等不調  
法。地よしそれとても與兵衛に逢へば知る  
る事。道も知つたる會根崎へたつた一飛。  
一走りと尻。三のつ迄ひつからけもみにも。  
うでぞ。三度。歌君を待つ夜はよやくよ。  
西も東も南もいやよとかく待つ夜は。フシ北  
がよい。さきにも待ちは待ちながら。こち  
からひたと行き通ふ。地道の犬さへ見知る  
程うつゝぬかせし河内屋與兵衛。小菊に逢  
瀬をたのもの雁よ新町の。花を見捨て、蜆  
川こゝの花屋にたどりよる。後家のお龜出  
で迎ひたまへ見えるお客にこそ。ようお

出が相應なれ與兵衛様はこゝが家。ちと風  
變り御出をやめて。戻らしやんしたか。  
小菊様呼びましょ。内は上下座敷もつまる。

濯の床几で大きく酒盛り〜と飲みかけ  
ましょ。地 小菊様サアこゝへ行燈に油さし  
や。油の序に油屋の女房殺し。酒屋に

仕替へて幸左衛門がするけな殺し手は文藏  
情いけな。與兵衛様まだ見ずか。小菊様連  
れましてちとお出で。地 やれお盃持てこい

と、フシたつたひとりでべり立てる。後家  
嗜めちと人にも物いはせい。生れて與兵衛  
こんなむさい床几の上で。酒飲んだ事なけ

れど今日は許す。東隣借り足して。與兵衛  
が座敷ぶんに一つこしらや。材木諸色諸入  
目見事に我等仕る。きつい物かく。エけ

びた。地 此の蒲鉾の薄い切り様はと。僧上  
たら〜あばれ酒 オクリしばらく〜時をぞ  
移しける。與兵衛こゝにゐるか。知らず

ことが有つて来た。地 刷毛の彌五郎床几  
に腰かけ。我を侍が搜すぞよ。ヤしてそ

りやどんな侍がと。地 胸にぎつくり横たは  
るも心に包む悪事のかたまり。俄に顛倒う  
ろ〜眼。ハテきよろ〜すないやい。

昨日から兄が所へ来てゐる侍ぢやとやい。  
ア、それで落付いた高槻の叔父森右衛門。  
地 逢うては難儀こゝへ尋ねて来うも知れぬ。

早う外して逢ひともないと思へど急にも立  
たねば。何がなしほにと見まはし〜。  
ア、思ひ出した。新町に紙入忘れて来た。

中にうめくほど金入れて置いたついで一走り  
取つてこ。地 刷毛も来いと立出づる小菊  
引きとめ。アざは〜と何ぢやの。在所

の知れた紙入明日なと取らんせ。イヤさう  
でない〜。懐中が重たうなければつんと  
遊ぶ心がせぬと。地 袖引放し二人づれ。ね

から忘れぬ紙入のフシ空糞はいて急ぎける。  
地 熱い茶四五服のむ程の。間もすかさず森  
右衛門行燈目當に花屋の門口。花車に逢

はうこ〜へ〜と呼び出し。河内屋與兵衛  
が跡追うて參つた。二階にゐるか下座敷か

地 罷通るとつとと入る。是々申し。新町に  
紙入忘れたとてたつた今お歸り。なんだ歸  
つた。まだ梅田橋越すかこさすか。是はし

たり又跡へん。然らば明日にも與兵衛が參  
り次第。酒でも飲ませこゝにとめ置き。早  
早本天満町河内屋徳兵衛方迄きつと知ら

せ。只今參りがけ櫻井屋源兵衛へも立寄り  
吟味致せば。五月四日の夜大金三兩錢八百  
受取つたと有る。こゝもとへは何程拂つた

隠しては其の方が爲にならぬ眞直にいへい  
へ。わたし方へも五月四日の夜に入つて。  
大金三兩錢一貫文。シテ其の夜は何を着て

參つた。廣袖の木綿袷色は儲か花色かした  
かりとは覚えませぬ。ウムよい〜。はひ  
れはひれ地と言捨て。もときし道を引か

へし又新。町へと。三三三。ワヤン變成男子の願  
を立て女人成佛誓ひたり願以此功德平等施  
一切同發菩提心往生安樂國。調釋妙意。地

三十五日お速夜の志。お同行衆寄集り。フシ  
勤も既に終りける。中にも同行中の老體帳

紙屋五郎九郎。昨日今日のやうに思ひしが。はや三十五日の速夜に罷成る。廿七を一期として不慮の横死。地平生の心だて人に優れ。上人の御恩徳報謝の心も深かりし。此の世こそ劍難の苦みは有れども未來はもろくの業苦を除き。本願往生疑ひはよも有るまじ。此の御催促に心驚き。いよく一遍の稱名も悦んでお勤めなされ。必ず歎かせらるな七左殿。殺し手も其の内知れませう。地只御息女の介抱が第一。先立つ人もそれをこそ満足と。示せば有がた涙ぐみさやうともく。お吉が事は思ひ忘れはも如來のお蔭と。信心堅固に悦びを重ね。地修行住坐臥に稱名は缺かしましてぬさりながら。乙のおでんめはニツ子乳がなうてはと不便に存じ。死んだ明くる日金付け餘所へもらかします。姉はよいひ聞かせたれば合點して。香華のきれぬやうに佛壇についてばかりゐますが。なう中娘めが朝から晩迄。かゝ様くというて。地ほえをりま

す。是には困り果てましたと。ちやつと後の壁向いて、エエテ聲を。のんだる吸り泣き。地尤さこそ同行衆も。フシ濡さぬ袖はなかりけり。折ふし居間の桁梁。通る風のけしからず。蹴立て蹴かくる煤埃。反古をちらりと蹴落して鼠のあばれは鎮まりぬ。ソレ何やら落ちた七左殿。誠にはと取上げ見れば半切紙に一ツ書。十匁一分五厘野崎の割付。五月三日とばかりにて誰から誰への名宛もなく。色こそ變れ所々血に染まつたる書出し一通。不思議の物と手に取廻し。是は誰やら見た手ぢやわいの。我等もどうやら見た手の風。ア、河内屋の與兵衛く。地それよくと四五人の。口も與兵衛に極まれば思ひ出して七左衛門。誠死んだ亡者が物語。四月十一日我等夫婦野崎参り致せし日。皆朱の善兵衛刷毛の彌五郎。河内屋與兵衛三人づれで参りしと話せしが。其の割付に極つた。お吉を殺し手も大方是で知れました。地三十五日の

速夜に當り風がこれを落すといふも。亡者が知らせに疑ひない。これも佛の御恩徳。ア、南無阿彌陀と平伏してフシ悦ぶ心ぞ道理なる。地氣味わるながら折々の訪ひ音づれも我がしたと。人にいはれじ悟られじと一倍横柄そらさぬ顔。河内屋の與兵衛でやすとつと入る。つい三十五日の速夜になりましたの。殺した奴もまだ知れず氣の毒千萬。したが追付け地知れまじよと。我と口から向ふの吉左右。七左衛門尻ひつ寒け寄棒おつとり。地ヤイ與兵衛女房お吉をよう殺したな。汝はこゝへ縛られに來たか。通れはないと棒振上ぐる。ア、七左衛門聊爾するな。シテおれが殺した其の證據は。いふなく。野崎参りの割付十匁一分五厘といふ書付。所々に血も附いて汝が手に粉ひない。此の外に證據が入るか同行衆捕へて下されと。地つかみつかんその勢。南無三寶顯れしと。つきあぐる胸の動氣ちつと押へて苦笑ひ。此の廣い世間幾人も

似た手があるまいものでなし。野崎参りの入用はおれがもめ。割付もなんにも知らぬ。よい年をして馬鹿ひろぐな。汝等までもおなじやうに。立騒いでなんとしをる。地まつかうすると掴み付くを取つて投げ。寄れば蹴倒し踏みこかし。一世一度の力の出し場。棒打ちたくり一振ふればわつと逃ぐる。隙を窺ひ逃けんとなれば。ソリヤ逃がすなと押つ取りまく。小庭の内を追うつ返しつ二三度四五度。隙を見合せ潜ぐわらりと逃げ出づる。門の前に。兩三人どつこい捕つたと胸がいつかんで

それ太兵衛其の給これへく。則ち五月四日の夜着し出でたる汝が給。所々の際付こはばり大理の廳より御不審。地只今證據の實否。汝が命の生死二つの境なるぞ。誰かある酒。あつといふよりちろり爛躑手々に提げさらさらさつとこほしかけ。かゝる甥持ち弟持ち心を碎く涙の色。酒しは變じて朱の血汐。叔父甥顔を見合せてあつとより外詞なく。エチあきれ。果てたるばかりなり。地與兵衛覺悟の大音あけ。一生不孝放埒の我なれども。一紙半錢盗みといふ事つひにせず。茶屋傾城屋の拂は一年半年遅なはるも苦にならず。新銀一貫目の手形借。地一夜過ぐれば親の難儀。不孝のとが勿體なしと思ふばかりに眼つき。

に引立て引出す果は千日千人聞き。萬人聞けば。十萬人残る方なく世の鑑傳へて君が長き世に清からぬ。名や残すらん。

ねぢすゆるは。檢非違使の別當大理の廳の官人なり。後に續いて叔父森右衛門聲をかけ。■最前より各表に立ち給ひ。家内の一々残らず聞届けられしぞ。必らず未練に陳ずるな。エ是非もなやな。世間の風説十人が九つと眼つかざりし。思へば二十年來の不孝

人を殺せば人の歎き。人の難儀といふ事に無法の悪業が。魔王となつて與兵衛が一心の眼を眩まし。■お吉殿殺し金を取りしは河内屋與兵衛。地仇も敵も一つ悲願南無阿彌陀佛

七行大字直之正本とあざびく類世世に有といへ共又うつし成故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくならず三寫烏鴉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後掾

竹本  
博教

正本  
山本九兵衛版  
(舊印)

大阪高麗橋壺丁目 山本九兵衛版

人汝を名ざす。聞くたびに此の叔父が心の内を推量せよ。地事顯れぬさき遠國へも落すか。さなくば自害をす、め恥を隠しくれんと。新町會根崎行くさきなくを尋ねても。跡へまは跡へめぐり出合はぬは汝が運の極め。■

縮めあぐれば。はや町中が斬着けく。すぐ